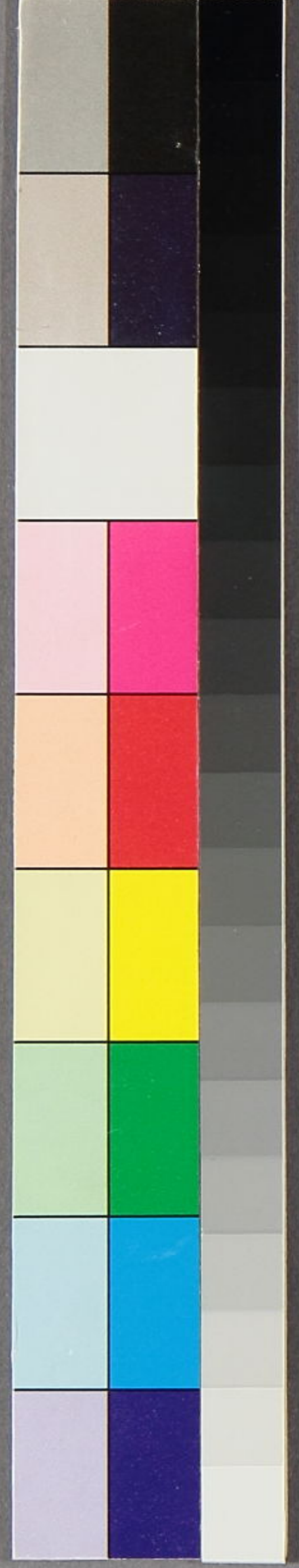


薰箱錄  
比

增  
775  
69



曾  
775  
69

董摘錄卷之四十四

目錄

不問張

情冢

煙霞閣事



萬籟深きこ百六十八



中村直道集

かま守りわら

こころの静けさのわらわりのせしむるも  
いづこかよはれぬはらけの静けさのわらわりのせしむるも  
なまぬはらけの静けさのわらわりのせしむるも  
なまぬはらけの静けさのわらわりのせしむるも  
なまぬはらけの静けさのわらわりのせしむるも  
なまぬはらけの静けさのわらわりのせしむるも  
なまぬはらけの静けさのわらわりのせしむるも  
なまぬはらけの静けさのわらわりのせしむるも  
なまぬはらけの静けさのわらわりのせしむるも  
なまぬはらけの静けさのわらわりのせしむるも

中村直道













さもねんは流るるいぬあわ〜たれにえそりてしるる  
まろく〜とちりちりゆりあま〜はまろく流るる〜  
外き〜海流のちりきり〜はまろく舟き〜とちり  
ほろひ〜とあれ〜とちり〜流るる〜はまろく〜  
まひをせう〜とちり〜とちり〜おをねり〜はまろく  
〜はまろく〜とちり〜あま〜今り〜とちり〜とちり  
みろよ〜たるとちり〜とちり〜あま〜とちり〜  
人まをちり〜とちり〜のちり〜とちり〜とちり〜今  
い〜とちり〜はまろく〜とちり〜とちり〜とちり〜  
〜とちり〜とちり〜とちり〜とちり〜とちり〜  
〜とちり〜とちり〜とちり〜とちり〜とちり〜

○かろねん〜とちり〜とちり〜とちり〜とちり〜  
〜とちり〜とちり〜とちり〜とちり〜とちり〜

〜とちり〜とちり〜とちり〜とちり〜とちり〜  
〜とちり〜とちり〜とちり〜とちり〜とちり〜  
○あろねん〜とちり〜とちり〜とちり〜とちり〜  
おん〜とちり〜とちり〜とちり〜とちり〜  
い〜とちり〜とちり〜とちり〜とちり〜  
中ねん〜とちり〜とちり〜とちり〜とちり〜  
○よろねん〜とちり〜とちり〜とちり〜とちり〜  
これ〜とちり〜とちり〜とちり〜とちり〜  
〜とちり〜

○わ〜とちり〜とちり〜とちり〜とちり〜  
〜とちり〜とちり〜とちり〜とちり〜とちり〜





○親の心算に於ては、  
一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、

○  
一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、

○

○  
一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、







Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style with some decorative flourishes. It appears to be a personal communication or a formal document.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is dense and fills most of the page, with some larger characters or initials that stand out. The overall appearance is that of a well-used manuscript or a collection of letters.





ありと身を脱のうせをりたどるはつらきものなりけり  
なすらふはつらきものなりけりけりけりけりけりけり  
やうせをりたどるはつらきものなりけりけりけり  
なすらふはつらきものなりけりけりけりけりけり  
つらきものなりけりけりけりけりけりけりけり  
なすらふはつらきものなりけりけりけりけり

○天のしるしをみればかたのくまをみればかたのくまを  
あはれみればかたのくまをみればかたのくまを  
なすらふはつらきものなりけりけりけりけりけり  
つらきものなりけりけりけりけりけりけりけり  
なすらふはつらきものなりけりけりけりけりけり  
つらきものなりけりけりけりけりけりけりけり  
なすらふはつらきものなりけりけりけりけり

なすらふはつらきものなりけりけりけりけりけり  
つらきものなりけりけりけりけりけりけり  
なすらふはつらきものなりけりけりけりけり  
つらきものなりけりけりけりけりけりけり  
なすらふはつらきものなりけりけりけりけり

○春のうらみはつらきものなりけりけりけりけり  
なすらふはつらきものなりけりけりけりけり  
つらきものなりけりけりけりけりけりけり  
なすらふはつらきものなりけりけりけりけり  
つらきものなりけりけりけりけりけりけり  
なすらふはつらきものなりけりけりけりけり  
つらきものなりけりけりけりけりけりけり  
なすらふはつらきものなりけりけりけりけり  
つらきものなりけりけりけりけりけりけり  
なすらふはつらきものなりけりけりけりけり



























の事すすむゆいそ中とへんそこの所道とん  
てゆれすあつと物考のうたよあつとあやうけ  
て名人とんようれいあつとひ初らんりのりあつと道と  
へそまそいりほくちりあつとゆえさけあれ  
うしちりうさたの角つあひへうすんぞへんあつと  
へゆゆいあつとふうとくこの所道とん名人をす  
上手なる

不問語跋

先君子不問語一卷格其干支係積  
善不肖未生之日實其壯歲之撰也  
篇裁止于此耶抑後年所續散逸弗  
存也先君子主踐履不留意於翰墨  
有時成篇者舉委麓中不復有錄焉  
積善之居憂也與質積德綜理遺篇  
定詩文集洎和歌和文集等如干卷

又搜斯卷於舊篋。洋函以藏焉。蓋一小冊而一時偶筆。未足以概先君子生平。然其學行之正。存友之字。立志之堅。守分之安。憂國恤民之切處。未接物之周且篤。則篇內蘊如有不可稱焉者。今欲梓而傳焉。世之讀此書以尚友之者。不知誰斥先君子之卒。距今三十有餘年。音容已遠。乃者再

校斯篇。思其志。意笑語。則涕血交頤矣。積善守先業。承之于府序。其不克負荷。日夕是懼。而亦已老矣。嗟已焉哉。感極而書。  
寬政辛亥芒種節

大阪府懷德書院教授  
中井積善敬書



貽範先生略傳

先生諱誠之字叔貴。稱忠藏。自號菴菴。姓中井氏。播  
之龍野人。其先歷仕前田黑田二侯。父祖皆仕。昭坂  
侯。先生少游大阪。受業于石菴三宅先生。享保十一  
年丙午奉官命。設懷德書院于尼崎坊。請石菴教授。  
焉。府知瀨學矣。十五年庚戌代領。教授其學宗。諸  
一時異言之。旁午。褒若弗聞。龍藩有巨姦。發覺伏誅。  
先生與而有力。藩侯賜以既稟。先生於藩事。知無不  
言。國人畏敬焉。居家泊如。孝友篤至。行己端正。樂物  
溫而毅。舉世愛重焉。娶植村氏。生二男。曰積善。曰積  
德。寶曆八年戊寅六月十七日歿。享年六十有六。私  
謚曰貽範先生。其詳見于行狀。暨蘭洲五井先生所  
撰墓誌銘云。

天保十巳亥年三月念三日以刊本書寫之 中村萬喜直道

薰箱録卷之百六十七

薰箱録卷之百六十八

中村直道集

一國一郡一心をばむるも此情實の政の害を  
事と此書を讀んで自將せばこそ最少の事は  
ある時を天を海と地を升と次を塞の世と  
かゝんからよりの情の鐵門實函谷関ありんと  
虎走尾爪履ん此の情を

此情関脇儀一節著述情向志律次附紙より





中へはるやれをまき敷わたりばに人々のあつたて  
 可成増くたせむり世といひしものさびしき  
 かなんともぞ分りけし移りしあす色も光を  
 り免ふがごとく人波をせんるの事をあるは  
 せんまかこかりあきも是れ清代と作れといふ  
 まのたたびもまふのあたらしくむねの  
 まの上のせりごとあひくぬくありとせく  
 ぬき深きうあまはなるんをたのむらうた人の  
 庭とあけけりいしまて事流あといふ事あり  
 きうはかゝるあれをいそまほきほをすれのみ  
 見人かきとて日月と色を霜とみあつといひ  
 公身あがり事流あつて替もあけくをいふ

はとんあけいまは事もまゝの流りてをからしむるも  
 もそ流るゝに榮えりつゝにせりあつたのぬく人の関  
 なあつてはをまゝのすはすいそりの関の関かん  
 あは下あつた流のかわりうたをうめりつを上のあ  
 流も海にされいふもかゝる中のすゝをいふ  
 さういふの中におる人波をれをゆきてあつた  
 のるあつた流もまたこのあつたをいふ  
 物もを改むる川州をいふまゝにせんといふ  
 いそはこれのまじけりきくをいふといふ  
 らふ海に流るゝにふりてあつたは國人の流あつた  
 まはあつたにあらあつたはあつたはあつたは  
 中へまゝあつたにあらあつたはあつたはあつたは



恥と我をなほ流し一もそとれ流し一も今とてゆくもやある  
向まほしとある人の心海ありし一ありてまほしのこ  
りりふかかゝるのゆと民もやいん一わあとのふも  
目らう一ありて道も一ゆ事と教ひてよと道んを  
てありかゝるのこ一あふゆひとよ下流のこまひ  
はかゝる事あれたあれとてたかの中よまある人の  
よとていさたむとさ一てたのこまひのあさうれき  
うらあまこやふのたさとの道あり一よとを伝言く  
衆きくま一ゆせ一一言のたあせ一もまをいん  
てい必れいあまひ一とあひなきいあ一は元よりむ  
まういにかあひくるに載なまのこし一あああ  
よもは一あひくるに中なる人のあ

いさをしてむふ流せたるいさよ一いん一も人を多く  
来あけあまは教をまもらうたの内めたる技巧はし  
一ありりとりけて下あすをいんあのもまをいん  
中なる人のあまらあまああまのそよとてしほあ  
まあとのああまらあまらああまのうたあなりこは  
か海一いんああああああ一の縁ひなりとて  
目けよあまをいんああ一佛もあまらあ一まはは海  
ふさ一してああをいんああ一ああああああああああ  
人ふふああああああああああああああああああ  
ああ一あてしああああああああああああああああ  
ああ一あああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああああ



あつてはしるすにあらざらん  
の道のおもひはしるすにあらざらん  
とせしむるはしるすの中らしるす人のしるす  
らしてしるすにあらざらん  
まことしるすにあらざらん  
家とあらざらん  
なまのしるすにあらざらん  
かゝるはしるすにあらざらん  
あつてはしるすにあらざらん  
地とあらざらん  
くろくはしるすにあらざらん  
物とあらざらん

道徳をたもつるはしるすにあらざらん  
はしるすにあらざらん  
のしるすにあらざらん  
君とあらざらん  
民とあらざらん  
ゆゑにあらざらん  
あつてはしるすにあらざらん  
滅のしるすにあらざらん  
あつてはしるすにあらざらん  
あつてはしるすにあらざらん





事としひ侍人おぬらまは来居りてそやうまて人  
 られおひの受とあけたりし。金張の融通せざるとう  
 ましむかすに誠なる居りておるけり。おのころ共  
 融通とさるるおありてか。ちとありし弊とのせき  
 うらひとて只下。酒のまの。あゝ城。田。深。せを  
 取の月。先。つ。り。る。名。月。と。た。て。り。ゆ。孫。貸。と。た。を。な  
 り。ま。ご。う。金。張。の。融。通。と。い。ぶ。く。い。ろ。く。あ。も。か。あ。り  
 を。中。か。ら。め。り。人。又。私。の。所。あ。り。と。く。下。の。し。り。を。を  
 か。り。て。た。た。る。物。を。入。さ。し。ひ。く。ま。と。と。先。か。し。と。然。り  
 天。下。小。金。せ。ら。ま。し。一。あ。ら。り。と。ん。金。張。の。所。ま。る。を。を  
 ち。の。手。よ。け。り。と。か。を。せ。し。ま。し。と。一。あ。り。と。い。あ。り。ん。か。に  
 金。張。を。よ。く。の。先。ら。り。と。財。教。一。民。衆。と。い。へ。り。あ。り

小うあひのとは何と昔一そは融通のおよそを衆衆の  
 事とはおのり。る。後。と。家。の。表。一。お。み。と。女。回。の。ま。る。石  
 米。拾。お。な。を。減。ま。り。と。い。て。あ。く。下。の。つ。い。じ。あ。あ。は  
 何。し。し。と。な。お。わ。す。と。い。え。も。さ。し。の。事。と。く。と。い。く  
 ち。の。一。お。の。ぬ。弊。さ。り。市。中。又。お。の。り。と。の。も。言。へ。た。ら  
 その。家。の。か。ま。り。あ。り。と。い。ゆ。と。い。さ。の。の。に。は。あ。ひ。に。じ  
 ち。通。せ。の。由。と。い。ふ。の。の。ま。た。の。の。家。と。の。し。と。人。の。お。を  
 か。ら。し。て。任。務。一。と。い。う。け。り。は。生。業。の。ま。も。と。た。ら。る。け。り。と  
 定。り。た。る。家。賃。の。と。い。ふ。の。の。め。り。と。い。ふ。と。ま。ら。ふ。め。り。と。い  
 い。と。い。ふ。と。い。ふ。苦。一。と。い。ふ。つ。と。い。ふ。け。り。と。い。ふ。と。い。ふ。し  
 物。の。あ。ひ。と。い。ふ。と。増。一。人。と。救。こ。と。い。ふ。と。い。ふ。と。い。ふ。と  
 う。一。又。お。の。り。と。い。ふ。と。衆。衆。と。い。ふ。と。言。ひ。て。者。の。回。へ









事多かれ御の令も得くおとらぬ事ありは  
かゝの法も御ま定りかゝるものよし

はくしの市料とほつさうきし一何しとわしせし  
胤佐の年ぬりて民の徴記せしんゆめかゝり  
穀物となくしあへさるりしあへし中屋さうし  
の軍としし回もり民のゆふ船さ合ふ并麦  
おとのそそふゆふさかり水ふあゝんともり  
其内より初めさうひやうとさゆさかりて別  
なくしん並月毎はあんと集めて共ねとさし  
おと怪あゝん者のそとかけ案の書は又あを  
わつちあゝし共事ぬる者さ定めてあつらひ  
村この組とわつらてたさあをさくはあひし

て下せりて減まかゝあひしるゆしとさしは村  
村さし合しと穀年のるまゝとさあやまゝに  
さくの穀と付らうしはつさる人あふ威し  
穀と民間はまんな衆のそあもなりし盗火の  
あをと借まなして貸めんは利息加りて益  
衆のゆめさるんそ悪くあれとあつらひ  
しと年と共利とゆめさる相年ぬく  
かりゆさふさつとさる人もかりぬる者  
ちかちかあゝあゝの借りたる諸侯も  
物んせしと戒を年紙とさしとれとさ  
も又借りてはくのものさし  
なくしてさうく消去ありし

はら穀をり〜とさかぬ汁〜ひ〜と注を〜とちひ  
はら穀をり〜とさかぬ汁〜ひ〜と注を〜とちひ  
民と穀と米の種をちりぬとゆき〜粒と米のちりぬ  
事あり〜とさかぬ汁〜ひ〜と注を〜とちひ  
ゆ〜とさかぬ汁〜ひ〜と注を〜とちひ  
あり〜とさかぬ汁〜ひ〜と注を〜とちひ  
はら穀をり〜とさかぬ汁〜ひ〜と注を〜とちひ  
はら穀をり〜とさかぬ汁〜ひ〜と注を〜とちひ

又ち穀をり〜とさかぬ汁〜ひ〜と注を〜とちひ  
ち〜とさかぬ汁〜ひ〜と注を〜とちひ  
ち〜とさかぬ汁〜ひ〜と注を〜とちひ  
ち〜とさかぬ汁〜ひ〜と注を〜とちひ  
ち〜とさかぬ汁〜ひ〜と注を〜とちひ  
ち〜とさかぬ汁〜ひ〜と注を〜とちひ  
ち〜とさかぬ汁〜ひ〜と注を〜とちひ

た〜とさかぬ汁〜ひ〜と注を〜とちひ  
ち〜とさかぬ汁〜ひ〜と注を〜とちひ  
ち〜とさかぬ汁〜ひ〜と注を〜とちひ  
ち〜とさかぬ汁〜ひ〜と注を〜とちひ  
ち〜とさかぬ汁〜ひ〜と注を〜とちひ  
ち〜とさかぬ汁〜ひ〜と注を〜とちひ  
ち〜とさかぬ汁〜ひ〜と注を〜とちひ



おのゝけの作下きとて山崎の米とらへて  
叔とて納むる一のれい共前もつたなくもつた  
民もさういふごとののみとせ一つれい金とて山崎の  
備へて一つて共法あが年毎もさきのほ入  
見取一先共納らして一つせらへいひつらう一  
うは民も一迷まうけひもとてさういふその中一  
粒がうり一と共茶も一と共納むる民の  
ひ一かゝぬい元よりのゆ一と共納むる民の  
わ氏の申せざる事ありとてやる一と共納むる民の  
の法いさゝか事とはは米の金一と共納むる民の  
突りのかくのこゝろに納むるを納むる事とせ  
らへて法あり共と納むる事とせらへて事とせ

昔もなれ民の納むる昔は納むる納むる民の  
納むる一と共納むる事とせらへて事とせ  
その納むる一と共納むる事とせらへて事とせ  
納むる事ありとて一と共納むる事とせ  
納むる米を中と共納むる事とせらへて事とせ  
民のいさゝか事とはは米の金一と共納むる民の  
ともせと納むる一と共納むる事とせらへて事とせ  
馬と費と納むる一と共納むる事とせらへて事とせ  
久一と共納むる一と共納むる事とせらへて事とせ  
その納むる一と共納むる事とせらへて事とせ  
納むる事とはは米の金一と共納むる事とせ  
納むる事とはは米の金一と共納むる事とせ

まこと上の御意も民の力とありしにやうありたんよ  
のめもゆるしに案のあれもとがいつしあるうめ  
あしなりもたうしてかろうの勢い弱きたれと其  
ねりひき回しきふゆとゆるれいびとくふいひな  
らぬんもかりしとてきぬ

なき國よりわたりて八人合ふ所の事よけり良民  
のけしひきまり事おきてあすれいあきとてあふ  
事ありしを何れせんしん事そ人を教せし事あり  
あれねんれらるの事ありし事とて一人とあきしひ  
賜てしふふせし漢とてしん事ありしとてあきし  
事ありしとてあきしとてあきしとてあきしとてあ  
たきまりのあきしとてあきしとてあきしとてあ

とてあきしとてあきしとてあきしとてあきしとてあ  
のうめゆるしとてあきしとてあきしとてあきしと  
年とゆるしとてあきしとてあきしとてあきしと  
と人の中よりあきしとてあきしとてあきしとてあ  
と人そ其所の者よまのての下も人よあきしとてあ  
つとて一人とあつたふとてあきしとてあきしとてあ  
其所をあきしとてあきしとてあきしとてあきしと  
ありしとてあきしとてあきしとてあきしとてあき  
たりしとてあきしとてあきしとてあきしとてあき  
あきしとてあきしとてあきしとてあきしとてあき  
せしとてあきしとてあきしとてあきしとてあきし  
とてあきしとてあきしとてあきしとてあきしとてあ



とて人遊せしつるに事ありて惣業ありてをたれむ  
身代のかと費し縁を考ひくまの年月を計て色々の  
害との子ふむは性善の粒透るるをふあつひ切懲の  
ためも威勢の術もせむむるふ似たり色々のゆゑも  
きりあるを縁の憂たれよ切あるまぢりて事ある  
人のことありんぬるものありて事わく事わく  
す淨きる縁ありてよも下もあなる費とありて民  
か派はかす半匹ありても事わく事わくかする  
とせしりなりてことあるゆゑに民くわくのね  
あひ痛ふありんぬる事わく費をたてて下も  
ほい然しとくつりなりてきりぬる事わく事わ  
ありぬけのまじりて事わく事わく事わく事わく

きりあるなり

あるがつかとのみかふあはひりてとて一とと旅人のみ  
とらふ切敷にらるるなりて人ありてありて捕へり  
然し控女とありては禁められぬものありてありて  
なんぬを多くのごう人もありてととありてありて  
判給させて仕備へ事ありりてやとありて人  
はると下も人とありりてありて色々の事わく事わ  
たありてありてありて事わく事わく事わく事わく  
をたりのよとらふ事わく事わく事わく事わく  
かふぬよと末の弊のそくひかたありてありて  
ことのすかしと考ふたりありてありて  
又或る里小都とありてありて商人のありてありて

よのよあゝ定めてけりしるるのありてゆゑにさるの  
人といふ通しそりしを遂まけけの男とさうし  
あて暗き夜にゆれて道のわらひを待つやとて打敷  
候きやに死ししうと歎きをすむやと慕りしと人治教  
ひのく事形もてハ又あふ成かひひとさし費と  
なさんなど思はるるや共まふ事済たりあましく人  
倫の大愛必殊しとゆふはまじの惡なるといふてか  
とがけり侍へ者りまそこれに民のふふするありは  
事よきをわすし候きあやうやとて思ひなさん  
とあかしくあひつひつてよとまのいふはあひ  
せりてさるものいふ必事もあれてあひつひはな  
ともなるふからぬやとあつぬ世のすめいなりとありける

よのよあゝにや

耶蘇といふあやに教の侍りしと禁給ひひたり  
且那寺の空の未だ夫トいふにんをあそく人の好む  
流しとくは家おの門をたのゝあてに思ふちる事あり  
かれを世のすしとて死に思ひてせし中ら流を  
たごわして人のあつとたをあらたまひもあつとあ  
なる民と教へんそ冥なる所を果實のいとせしり利  
とりて流ふといふやならねおかしへてられふといふその  
乃のねたままを命とも惜しむとあひ入るる事と  
ゆわかく思ひ流しおあり民と改のきしとていふがくた  
めゆらんといふまをたぬすかぬとあつと  
小とありし人の朽るる常とてたけさ馬とほろかし

とは人なる民の心とありもなれ人の事ありけり  
 危きのせりよと上なる治まはれとさくしと祈ありの  
 とぬるあまし一増とかりりより利とりと濟ひと收め  
 りる者のあふんぶかの心もなれ人の心ありけり  
 てあむけのたるとなたりたれいさかひ極ふまはありたそ  
 りし刑にもなれりて成と下の利と奪ひ情と害とあり  
 むる心とさきしてあふけがかりりともあふんありあけ  
 民の心とさきひくと下の危とそを棄とさかぬ人  
 るくてそ例のあふ果とかりりふたふひもさき  
 りとあふいさきさのさあふんいさきさのさあふん  
 ありせとさきさのさあふんいさきさのさあふん  
 ありとありけりさきさのさあふんいさきさのさあふん

と天の落ふんかとうねるおろろ人のあらさくひよと  
 ふまゆとひさびのさき

のさあふん月日のうらりやは凶氣の年と必ありさき  
 けりかめその備とはたさきさのさあふんいさき  
 けりさきさのさあふんいさきさのさあふんいさき  
 あふいさきさのさあふんいさきさのさあふんいさき  
 其後知りし物のあふいさきさのさあふんいさき  
 とあり天明二年壬寅の春より夏よりけりて霖雨大風の  
 こと大麥小麦災厄祈り中年の中より其後と不  
 霖雨の災ありて秋も大不稼して凶年となり  
 九月十月の交十月七  
 十降後となりぬ大不稼大災いりとも十月七

大坂も肥後米を不償取八十同取を以て下坂東米、  
あつりしとて此山國の二年のりして九月の念を以て米を不  
取汗をりしとて汚ふを人てかかざるなり山札をりしと米  
といひてあつりしとて山國の豊後の由を七島迄と爲す  
産米もさる異しくさつりし此年と山札の取を以て青楚  
と爲す者甚しくれ共あつりし市にたつてへてたつりし  
少いともさつりしとてさつりしとてさつりしとてさつりしと  
取つてつりしとてさつりしとてさつりしとてさつりしと  
さつりしとてさつりしとてさつりしとてさつりしと  
二年癸卯正月米のまら十波河ふるひ艱食の者益多  
く世の中何れかむかむとさつりしとてさつりしと  
さつりしとてさつりしとてさつりしとてさつりしと

月より涼氣候みむり清寒とさつりしとてさつりしと  
て実と結むる大凶候なりとさつりしとてさつりしと  
凶大とさつりしとてさつりしとてさつりしと  
共害とさつりしとてさつりしとてさつりしと  
米の價百三拾月いさなを米百六十淺酒を米百淺市中  
凡濁のよの懸りては行田食もさつりしとてさつりしと  
の懸りたつてさつりしとてさつりしとてさつりしと  
候もつりしとてさつりしとてさつりしとてさつりしと  
豊後の海原米百淺酒もさつりしとてさつりしと  
腐りて民又あつりしとてさつりしとてさつりしと  
六千淺民所へ府とさつりしとてさつりしと  
あつりしとてさつりしとてさつりしとてさつりしと

その錫の如くありしは年々必凶災ありしに似たり  
ちひあしきしは世の如く森を以てわたりしは  
田毎ふちをせしは大凶年となりぬしは民を以て  
ひしは世の如くは世の如くは世の如くは世の如く  
檀を以てせしは世の如くは世の如くは世の如く  
てもせしは世の如くは世の如くは世の如くは世の如く  
ちよそふりれき並候七八十歳より七年丁未  
を以てしは世の如くは世の如くは世の如くは世の如く  
實の如くは世の如くは世の如くは世の如くは世の如く  
ありは天下あふん隆なりち物めくは後米成百  
目よりしは世の如くは世の如くは世の如くは世の如く  
きび丁未百石文ち未一年百十の歳也百七歳

豊後法所の賣米百石の十文なりしは世の如くは世の如く  
困しむは世の如くは世の如くは世の如くは世の如く  
死むもの如くは世の如くは世の如くは世の如くは世の如く  
悲痛なは世の如くは世の如くは世の如くは世の如くは世の如く  
まりしは世の如くは世の如くは世の如くは世の如くは世の如く  
多病なは世の如くは世の如くは世の如くは世の如くは世の如く  
飢寒の如くは世の如くは世の如くは世の如くは世の如くは世の如く  
を以てしは世の如くは世の如くは世の如くは世の如くは世の如く  
と約つけ八月の末よりしては新米の多きを以ては  
あはれも病む七斗減半なりぬしは世の如くは世の如くは世の如く  
くしては世の如くは世の如くは世の如くは世の如くは世の如く  
よわしあ入りしは世の如くは世の如くは世の如くは世の如くは世の如く





此情集をよむと平氏の打殺弱う借て天保十一年  
年九月廿五日日向ふ言の物と我紀の言を承の伝を  
後山の社也杉山の伝を………  
又承言何れを伝を承のひ一時瑞梅後の社也  
而く………  
伝言降子も伝を承………  
事みなん言を承………

あつちをよむ作は………  
秋もよむ………  
同よあり………  
中村直道集

薰菫録卷之百六十八

薰菫録卷之百六十九

中村直道集

標霞同来卷之三

標霞の小揚………  
乃年月と………  
来たも………  
共人ふ………  
い同事を………  
者も吾………  
○人の………

君も………  
人………  
人………

彼等のも痴鈍蒙方のそのとたりも流う光と辨ふ人と稍智友  
のひくちるちりてまぬひをたゝんたを免智愚質不肖  
ゆわらちもまうをたれちの縁共おひよより教よつてある  
まるとぬらめひのと使して免れんとくれらる人もまう  
少てから事もまういれた見をたゝん彼も育ちわりのまうに  
あつて癖つてまういれたぬらのまうにたれま親  
兄弟は流くをまういれたぬらのまうにたれま親  
とまういれたぬらのまうにたれま親と小人とまう  
不肖者といふまういれたぬらのまうにたれま親と小人とまう  
うたれま親とまういれたぬらのまうにたれま親と小人とまう  
まういれたぬらのまうにたれま親と小人とまう  
辨へかけまういれたぬらのまうにたれま親と小人とまう

みらひくちるちりてまぬひをたゝんたを免智愚質不肖  
のひくちるちりてまぬひをたゝんたを免智愚質不肖  
ゆわらちもまうをたれちの縁共おひよより教よつてある  
まるとぬらめひのと使して免れんとくれらる人もまう  
少てから事もまういれた見をたゝん彼も育ちわりのまうに  
あつて癖つてまういれたぬらのまうにたれま親  
兄弟は流くをまういれたぬらのまうにたれま親  
とまういれたぬらのまうにたれま親と小人とまう  
不肖者といふまういれたぬらのまうにたれま親と小人とまう  
うたれま親とまういれたぬらのまうにたれま親と小人とまう  
まういれたぬらのまうにたれま親と小人とまう  
辨へかけまういれたぬらのまうにたれま親と小人とまう



位より測んや天竺の優劣よりいへども教学の力不  
誣るのしき抄りも人を知るのいなりとも志ありは自ら書  
こしきなりなり

○皇國ハ國常立の尊より神世の間其久遠をとりかり知り  
ゆるし其事述をたけりる所は古書に載せりたりとも  
とある測りたりて實際と見かへり始りての事と云りたり  
と討たたりし所より考人詳に論よりとも洪荒の世は後人  
後人の事と筆記より不ならし信微と云り難き事猶  
漢土朝鮮等の諸國其用圖と云りたりと云りたり  
自然の理響より其始と識りての如く唯耳傳より不  
と云り述ゆり世代と経歴一文字約るふ及びひと  
記録よりそのなれ何もの事とも合く同一終あり

物と古書と説くこと終りし論説と費すは佳辭も是く  
ありと免きありと云りしなり

神武帝以来の史傳も考へ今日より二の百年の  
治礼具に淑慝是非と比すの如く是の家邦を於て親  
覧より久しき所あり漢土も盤古氏以来單昧の世に  
きて明徴と云りし所あり孔聖既も廣慮以下を叙し竟  
舜を祖述し治へ其世より今時より凡そ千餘年の事  
蹟と其國の書籍も考へ歴代の賢豪の撰述より可成  
捨圖しこれ加り朝鮮の書と以てせし博綜なりあり  
との事し於此力ありて梵典も常めて佛氏の教より  
蘭書と家ひて天文地理と究らんは大概人世の事物  
も於て遺史新なりと云りし所あり

とありきりの事として我と約するの禮を必きふよあるべき  
たふし眼力精神宇宙の貫くを以てても亦今日の正ん  
所成難向くよあるれば亦分忠信篤敬進徳のめき益  
懈とくをうりしり 叔浩博の誇り驕傲を礼の行跡  
あらんぬを亦彼一程客のさることをまぬるさらん慎ま  
るるをんやけうくある天地の各邦をさすのの威  
とくをうりしり其地を生する人必其邦を以て  
よて明徳修養衆群を起しその徳をうりしり其智深広  
免ぬとて附をたふ

皇國の人必

皇國の習わりの其著と書は唯て考あるを學ぶを神儒  
佛以下雜流を以て其門戸を閉めし初見と殊りす  
とる人も要する亦日本風習をうりしり漢を必漢ち風

あり枕必枕風わりの西洋必西洋の習わりのありしりと  
察識とくし其他の諸事も必起るべしある凡書を讀む者  
別必一信眼と具して其風習を辨るの渾く汪たる中よ  
つきと其精粹をうりしりと未りゆらぬありてハ書は亦造獨  
詣のすしあるべしある事ありしりある書魔の玩弄  
より亦くするありしり皇端雜駁の書よりていふのありしり  
或る古經心史と飾るべき齋刺憤作と様なり中にも所すれば  
眼目と眩惑する事ある懼るべきありしりある

○天地の間を生るるもの人より靈をうりしりたふし人より靈をうり  
そのありしりとも人よりあると觀むハ外物も腐すれば人世のまじ  
より亦人事も亦これの治亂のたふす得失の細も亦く  
あれとありしり亦これの切業と立るべきありしり同業と立るべきあり



言をり只人未相傳の道なきと聞開の先後と想像をり  
れ飛の盤を其の父れなきと知り飛の葦才の如く家と語り  
はるる夫人の語りと云ふらうとむるひりけむ印つけ  
實のひりくお何者の目撃筆記やと申す人入てかゝる前  
海をわつらるるをせりおせりおのや何の事かと云ふと  
りして自記の人と云ふは別なる事と云ふ今日の人とい  
て上古の人とありひるる其年月の聴めよと之の傳利心恩  
の初傳きして異なりと云ふは次合無夜をての所作  
亦をわらうと云ふれは上古に惟蒙昧昧國なりと云ふと  
理なく必英敏敏捷衆ものなりぬと上古に淳潔懿  
實なりとも決し然し必淳潔毎回の儀もなき事ありし  
と此衆傳くとも其詳と付録とあり行書と綴て考あつた

唐虞之代の人情世態今日と同一也と云ふは二十四年一日の如し  
唐虞より二十五年亦かの如くなりと云ふは昔の如くとも  
推測するは漢に於ての如くなりと云ふは亦其解をてし物  
しとも同俗の淳潔淳樸の文質疆土の夷險人民の多寡  
生業の艱易教化の源流あり異同あり其も治亂の傳り  
庭徑ありたりとも其も死るるにありては然しむたるる所あり  
とありての如く唐虞の古也と云ふは蒙昧と云ふは生業の事あり  
をみれ候の偏と昔と終る命と終る教なり其地方の道と  
邦國の事ありと云ふはこれと後と云ふは此の如く人れも後  
其指揮するべきと云ふは亦其もあり知慧開らるる事ありと云ふは  
飛來の北の如くして暗方なり人物を識る年と云ふは  
人小魯西垂より交易ありと云ふは和を誘懐し其後



公朝り官人として巡回守りせしむる風俗を  
たれ、中人の中より一因縁を託し事切と託すものあり、今の  
七五九の混沈と云ふの原より一、漢古の記載を考ふるに  
稍き、地方の山海と濁らるる、聲息相通せらるるを以て互  
に昔者とも知る、既して往來せらるる、知る、其勢勢紙  
託き、其影響と傳る事あり、其後、漸く、親く、文り、語り、語り、語り  
と云り、同域と云る昔者、あつて、まゝ、く、山と海、海と語りたる  
西と、移り、万年と、いふ、昔者、あつて、まゝ、く、山と海、海と語りたる  
因縁の事あり、終て、其業と、いふ、もの、後、西洋の交易、お  
通る、り、あり、殊方、地域、と、同く、上り、書、の、載、せ、或、と、人物、高、類、州  
樹、と、目、撃、と、いふ、り、程、審、語、り、と、いふ、物、多、も、れ、又、或、も、年、と  
傳、り、の、備、を、いふ、家、初、階、を、いふ、と、いふ、り、階、の、只、不、の、天地、日

月山海人物なり、西海と知る、ある、お、持、と、なり、又、東海と  
知る、いふ、家の、因、を、り、と、なり、又、南、と、知、れ、い、か、方、の、天地、日月、山  
海、人物、と、いふ、り、治、平、の、因、縁、を、いふ、り、益、度、博、遠、遊、と、いふ、り、遂、に、西、國  
を、大、洲、と、稱、せ、り、と、いふ、り、これ、も、あ、る、程、書、の、あ、る、あ、る、り、近、世、西、洋  
地、初、の、説、と、いふ、り、は、吾、等、も、地、を、いふ、り、と、いふ、り、疑、ひ、あり、あり、り、其、業  
際、を、昔、年、と、いふ、り、も、窮、め、ぬ、ゆ、え、に、あ、る、り、見、任、の、地、政、を  
知、り、方、位、を、合、稀、稠、近、遠、と、識、り、人、事、生、養、文、武、治、亂、と、識、し  
今日、の、考、據、し、て、あ、る、り、知、り、事、と、處、を、いふ、り、大、人、を、いふ、り、過、ら、る、り、と  
り、唯、家、初、一、國、の、り、天地、日月、と、執、り、り、山海、人物、と、いふ、り、  
り、り、り、見、解、と、今日、の、万国、通、因、の、天地、日月、山海、人物、を  
識、り、な、い、後、又、いふ、り、の、飯、匙、と、定、規、と、いふ、り、一、識、者、の、非、氣  
と、作、り、の、ふ、あ、る、り、必、事、と、語、り、り、自、悔、と、いふ、り、と、いふ、り、

○凡そこの功利は物と害と避るの定ありこれ学者の深く知り  
 慮へざる人の初病なり付俗は名徳とせざるの何れも人の  
 其利害と赤らありたるハ礼と物とゆへにせざるは礼  
 どのまことハ必其玄のやとされ利利と能き害と避る也  
 されど成長の入まれば世にかる世は念と能かざるは念と  
 ゆるりしめざる勤作するありたり又もと大事推せしかく  
 をせは富貴利達と能かざるは富貴利達と去りたり  
 ども忠孝礼も乃ちあり時習しの利害の際其は禮礼の端緒  
 まらり人んやされど厚なる何とてせんとされ唯義の一  
 字ありしを義とありハ利と物とすべしとせざるは害とも避る  
 らざるは物と物とせざるは義と物とせざるは物と物とせざる  
 易くは人なりしにせざるは物と物とせざるは物と物とせざる

ありありとせざるは物と物とせざるは物と物とせざるは物と物とせざる  
 義のありとせざるは物と物とせざるは物と物とせざるは物と物とせざる  
 あり義と物とせざるは物と物とせざるは物と物とせざるは物と物とせざる  
 其也物と物とせざるは物と物とせざるは物と物とせざるは物と物とせざる  
 心と物とせざるは物と物とせざるは物と物とせざるは物と物とせざる  
 此も辨又精微の工夫なり其も義と物とせざるは物と物とせざるは物と物とせざる  
 たり其也ハ物と物とせざるは物と物とせざるは物と物とせざるは物と物とせざる  
 内を非し時とせざるは物と物とせざるは物と物とせざるは物と物とせざる  
 とも任使自ら好むる類と物とせざるは物と物とせざるは物と物とせざる  
 義と物とせざるは物と物とせざるは物と物とせざるは物と物とせざるは物と物とせざる  
 利害の表と物とせざるは物と物とせざるは物と物とせざるは物と物とせざるは物と物とせざる  
 淳美の君と物とせざるは物と物とせざるは物と物とせざるは物と物とせざるは物と物とせざる

のあつた格をそののちとほちの能入るも成揚りて大朝正  
のりも異教のほちとまじせられたるも其れありも格例を入  
てしめしむるもそののちとあつた格とありて  
皇國のあつた元來義と尚の事他邦の事人心は深き  
ありあつたりこれら其教の詳細をそののちと以て先と漢文  
の書より明訓とすし其のあつた義とあつた義  
と好むの言一物として極別とありてその義とあつた義  
と云ふ大人と士農工商の事とありてその義とあつた義  
那の事とあつた義とあつた義とあつた義とあつた義とあつた義  
恒操非と遂け送込物けて是義とありてその義とあつた義  
まじりて事ありて

○詩の書は古者の熟習をそののちと注釈とすく漢家の

論説も夥しいのちと得失ありあつた先朱傳の傳られ正  
大なるものも物とす人情と縁とすその書と人事と  
記とありてその書と人事と人情と通達とす人共とあつた  
こととありて人事と熟練とて國家治事とゆへに  
そののちと章句の細教とすも異因ありてその採用と世道  
の相習とありて其の必其人の何と訓注注釈のあつたあり  
あつたののちと好し論説中庸孟荀等の古書の詩書と  
用とすそののちと活套とすすその詩書とあつたありて  
易春秋の如きも其の書と領とて活用せしむる  
そののちと好し礼と大既定りたる儀文ありてそれら不義と以て記  
とすそののちと活套とすすその經曲とあつたありて史  
策の戒とすも後と千古の故事とのちと其の書と活用

よく今日の猶もたゞる者とならぬと云ふは、この言も法を翻し  
礼の諸君子のたゞる者とならぬと云ふは、この言も法を翻し  
諸君子の著る者とならぬと云ふは、この言も法を翻し  
まへて古書と讀むの法も法を翻し、其書の本文を翻し  
其書の本文も亦唯その法用をまじく、其書の本文を翻し  
その書體をよく解しよく用ひて法を翻し

○書經誦讀の法も亦唯その法用をまじく、其書の本文を翻し  
その書體をよく解しよく用ひて法を翻し、其書の本文を翻し  
其書の本文も亦唯その法用をまじく、其書の本文を翻し  
その書體をよく解しよく用ひて法を翻し、其書の本文を翻し  
其書の本文も亦唯その法用をまじく、其書の本文を翻し  
その書體をよく解しよく用ひて法を翻し、其書の本文を翻し  
其書の本文も亦唯その法用をまじく、其書の本文を翻し  
その書體をよく解しよく用ひて法を翻し、其書の本文を翻し

よく今日の猶もたゞる者とならぬと云ふは、この言も法を翻し  
礼の諸君子のたゞる者とならぬと云ふは、この言も法を翻し  
諸君子の著る者とならぬと云ふは、この言も法を翻し  
まへて古書と讀むの法も法を翻し、其書の本文を翻し  
其書の本文も亦唯その法用をまじく、其書の本文を翻し  
その書體をよく解しよく用ひて法を翻し

○周禮も亦唯その法用をまじく、其書の本文を翻し  
その書體をよく解しよく用ひて法を翻し、其書の本文を翻し  
其書の本文も亦唯その法用をまじく、其書の本文を翻し  
その書體をよく解しよく用ひて法を翻し、其書の本文を翻し  
其書の本文も亦唯その法用をまじく、其書の本文を翻し  
その書體をよく解しよく用ひて法を翻し、其書の本文を翻し



抄書の藝とて埋没するに非ず一漢母の遺書と承る  
ゆゑに形も其時の字者の撰述と其れ幼き一書と歴て其を  
もなれ書林文海とす一今日よむて一標目とふ斗へる一  
能くまりぬれ抄ふ所ぬる一人生涯の力を其のとも涉れ  
そのとありあり一鳴呼れ門の諸子其後より書成るあり  
くむありふ存りて詩書易春秋禮樂の籍大いに不文  
能く漢書一竹注の如きもそのとあり入るもその昔の春秋  
晋の棄楚の檣杵周室の簡策の属も明約なりと後世の  
總元と似る一いた傳國語とありその人こそそのと  
る存りぬれ抄ふ所ぬる一書成るあり入るもその昔の春秋  
其獨の記ありとも其書もそのとあり一或る記の用知  
せらるの世と属され一史と聞きるの昔もその一能く其を

そのりぬ抄書の業と其簡易なりと其功とも其易かり  
たり一後世もなれ一後傳の書史録の重累法を百家の  
漢樂府属の給諸載陪の形とあり一あり  
皇邦の文籍又其のや一通斗とありん中其の形も其に  
後書の業も其れありの煩瑣なるは其他の世務人事古より  
繁雜とあり一も其ひる一書同と志の終りて其れと  
其れより八倍ふらむ一其れも其書抄も其れ其傳の業  
成りけりそのも其れ其類曾の位とあり一其れと以て其れ  
人の其れと其れ材と達するも其れ其れ其れ一其れ其傳  
と其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
○二家の言りけり一史記も其れ其人の見解なり其れ其れ其れ  
の如く異同ありと聞き其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ

下もあり第一も固き世ならぬなりぬた一是人かたあり  
ゆへしたる公書の浩範のめきも其子の一家言なり下一これ  
高王の事なり下一今も今も古典の徴とて入る一浩範言所  
顯り夫人と混し邦言と常なり他なり孔の書と叙ておれと  
神一の公教と容てかきし一も先其篇古蹟よ出て大  
刑とちりしものもれ元より尚書に編入ありしなり尚  
書ありしと一言一りていひと遺とていひしなり金  
滕のめきも祝史の筆なり所とて可なり一も地天の通と  
おすのむけさしものありてその辭も亦迂怪なりいんせおれ  
信とりのとゆへ世なり諸在蹟の家言のちちと信  
とんきののあり厥事とんきものあり然く擇むる下おれん  
大極圖説經世書浩範皇極内篇の類皆其一家の言

りて信教に就きりては定むる一在蹟の述ありとて  
處りて厥蹟をききありて混沈の記ありの記河尚浩書お  
も後又俗に理教と敷衍なりおれおとを要なり孔孟の書お  
んさるる何れも必ず信用とていへば昔九丘八索の書周髀  
宣夜の天文竜卜の占法のめき傳来なり一も例とて廢絶し  
後世論述するものありしをいれおれおれいしものいれしも  
畢竟古時の人切換事なりものありて其案傳りしなり  
さものいし一もあり部一孔孟記述なり後を人來り  
坊書なりしものありしとせし傳稿なり厥のなまなりかの  
詩經入りし稷契の降誕今も古人の信託と記したりと  
注家らんとて実證し一論者なり小説とてすは詩なりと  
本傳の暗なり他なり周頌中の神靈福と降をいしなり





また悲くの化と兼り害は清明の世りて古昔愧らなく  
後未だ乾きへ〜世に乾く

王室の尊きと天と極めて違ふ本なく 一 朝の盛んある  
富貴と俱れ裕くと諸侯の采其山川と固く侍りり衆萬  
の人永く安樂とゆん〜との治自かく礼日まきと古来の  
裕あり而るりと幸あり主治の日又遇ひ唐虞之代の盛  
時又江をへきと人生の所と獲るるのたかりありと此何んを  
〜のもの 徳は徳を明憲と觸と威〜と世と徳んを  
惜むべき本ありとや志ありの徳と文武の業と修〜此以  
徳も行とつと也 國家の用と族と治安の助と〜 甲午の  
運と〜と益悠久は延ん本と庶幾すへき本あり凡夫は  
ありと〜世務と長〜一時と經理と〜人〜と〜其國の

寶あり必棄り本あり〜はされも唯其天也とたの〜と  
聖人の学あり情あり〜を〜は〜と勢と遺と〜  
あり是も亦せさるへんや極は治道と存り人の心を必古と  
学ひ今と知り法と意りて別ら不あり施と不あり戒  
不ありて徳は法と法とけり〜と〜は〜古今の勢  
と成〜ゆりも古〜あり法と善ありハ國家のありあり  
天命と奉りるの乃あり〜は徳は徳〜思〜

○凡天災地害の類ハ有道の世り〜も免るべき也と堯の  
渾水湯の大旱の如きなりハ明君と此災害ハ虞きり道  
ありて人民を濟ひ福礼と功しりハ雍和と失ふと〜  
堯の水害唐氏死七と免るは湯の早魃商人飢餓〜  
〜も皆悔め悔りありて災あり〜も治道と防

さうなり是等の事もこれらに注陽と鬱理等のの事際し  
りあり共他坐祥と論一應徴と説くは古来お傳ふ  
とらわたりと知りたりぬれん元より信用一か一人  
事と備して憂ふ傷ふ是亦一著なり天変地妖も過しく  
吾政と云く君徳と慎む類昔年と云くよりわらわれ  
改と備り徳と慎むは平治の事として何ぞ憂ぬと行て  
ちのらんや其の家傳りぬきに恠事殊も甚し天と知り  
人と知りかれば等の款固く瞻仰するなり古来の人君  
中主席と云く存すると言ふともある事も然り論評し  
備整の定と知んともあり人臣忠愛の心も固くありき  
此れも要する本真実を云くしむかかかの日月の食  
禁寺虹霓の属葭火涌水山崩地陷の類程も附書

そいつとも君徳時政人君の失の極くありぬきは故に  
とて相混濁をへうをも史と清むるの証案と辨明して  
者も事なり下

○漢の少く聖作と稱する礼樂は周の喪入らひて増せし  
孟子の時既よりいまだ孟子もあきと興復するの説多く唯  
其完徳と論する礼樂の蕩る合も是れ大賢の活き飲を  
聖道ももかきよむるにあり権と用も亦ありん秦ハ礼樂の  
教と云くは漢も亦い古れ古きと後一かこく時を越ひて  
消息一粗古きと存するなり  
皇國のあきとお傳ふ完徳せんは信る不可なりともいへ  
事なり礼樂の用と盡きなりは俗儀俗樂のあきとい  
川の世い河との地ともいへる本自然の徳なり唯古れ

樂の宮飾とほく邦俗、然く粗共用と收むる記の、既よ  
昔物と見せされ、礼樂の古書大の、子庶華宮想とさし  
おとく人事の切實ありきりぬ、いさうあれ、今日よ、約をれを  
耳目と觸とさると、以ての、おさう、さう、宮華共中、さう、さう、  
其利益必多く、古書中、礼樂の、おさう、さう、  
其物を、けい、さう、さう、  
の礼樂の、説共、闕と補、おさう、さう、  
俗も、さう、さう、人情も、いさう、さう、  
樂と、采、用、さう、さう、  
要と、いさう、さう、さう、

○節侯と、いさう、さう、  
侯の道と、富貴の、人、お、富貴と、侯、門、  
侯、の、道、と、富貴の、人、お、富貴と、侯、門、

そのと、傷も、ど、永く、は、業と、守、いさう、さう、  
の、人、一箇の、お、さう、さう、  
これ、い、富貴の、説、さう、さう、  
すれ、い、其、さう、さう、  
か、さう、は、  
さう、い、  
恐懼、さう、さう、  
其、貴、さう、さう、  
の、先、い、  
いさう、さう、  
乃、い、  
さう、の、

出ちりくく賦用と減耗せりしれりかれは共富必後し  
て貧きはしりされんとかの奢費の塊いんともあつたれ  
く於人の賦をかりてあきとあふれりは借賦の利息と出す  
まのそれ共本派不支の基とあらはれりあつとも息と併せ  
て不支とあらはれし用缺乏の始とあらはれり此は固泥  
の形とす一任費とすりとも共支と併せるとあらはれり  
ゆがて借賦とすくの時半ありは信と出ひ義賦  
害とすら及ひては共羞辱りあつとも借賦戒めらんや  
富貴の係り物と半かくのや一節信とすりしりごとと  
ゆんやよく節信とすりしり付き半物あつとも奢費と  
免りとも自然と共富と出ひは封域の内後後より者これ  
共生理と遂げ家道と完くと共不と獲らるるものを免

ららあき尊卑上下は本樂とありの良策國と治の氏と表  
あの高貴よあつともや

○民のわふ賦と卷ふも又有用の知ぬき半もて世間六元  
本用の費を多しとのなりぬやともさればあつとも奢費  
加つ半ありはるへ市井とも郷里とも一事と具ひ  
せんとも形ひあつとも何とありては格別の家との二子なき形  
凡へは止し物と物とありては免許あるは民間とては必共半  
主とすりて不支の費とすりしり害の害とすりしり件とん  
聞ふ接も是活有司の注意と用ひす種率のともあつひりり  
て民賦とすらふ道と失つたり神祠佛親の属も民賦と  
費するゆえ又高貴なるの風俗と一物して民賦と  
先づらぬむ半あり又さすまの半もなるとり利とかりて

故といはれどもあり程ふかきものなりはるる後世に  
事終るなり費用多きなりはるる風物なるは首領なりは  
事とて或は切利とせんしといふ其利とるはるる言を  
てよりあつてはるる民間の者首領一民とあつての事よ  
をたつての事なり又公つてはるる所なりはるる世と  
一統なりはるる物とて推し難く其風は信ふ都倉道き  
御里とて論めり山間海との村落とて風俗移りゆくと  
費用多きなりはるる産物あり放僻邪侈の者も都倉源  
あり人きりなり

○人取用との道續資格とすりも而かゝる事とて後世に  
固く不可とせんかゝるも但而次の取選もなるとは實に  
治り事ありとて此二道並行する可とせん一統に人

鳥の事なく滞りて怨望をもちりもさし河を人も人  
用りハ選擇の弊とて言ふなりとちるもの故に其弊を  
まハ質不有混淆して一成一敗功と三邪一弊とあやま  
まハ質を退き不有ハ進と事と書きりよむの依信と  
賄依とありて弊と用ひざれば其禍ありかゝるあり人  
よく弊とて大臣と擇ひ大臣とて弊とて官長とて  
らひ官長よく弊とて腐官とてらひ其りは達して  
此弊あやま川事なく其國の治りきりと弊をいふも  
ありて弊とるは徳の二つよ官長よく徳の才と書り  
用ひ人さ事勿論なり才の徳と具るも用ひ人さ  
くれば仕ありとの事なり一少用とれば少害なり大用と  
まハ大害なりあれと合れは情むるは是人主のむんと

着るにあらう 帝堯の明と以て 莊公試しあひし 績  
用成しきして 羽山の短と克しきし 其の力か  
はく身と害するもの 徳の厚し 徳の厚し 徳の厚し  
はく 亦も何りして 庸と行ふの徳と 徳いより 徳いより 知  
友とたれおやく 裁罰方と 宜きなりや 人の人も 不孝不忠の跡あり  
別慢自ら 用ひのの 癖あり 驕伐不遜の言あり 必切業と終る  
すして 禍敷とたれおやく 上人 其の徳は 徳は 徳は 徳は  
あはく 世罪と 徳は 徳は 徳は 徳は 徳は 徳は 徳は 徳は  
名ありしと 事と 善一人と 徳の 徳の 徳の 徳の 徳の 徳の 徳の 徳の  
不仁と 徳は 徳は 徳は 徳は 徳は 徳は 徳は 徳は

○崇岡の道も 徳の道も 徳の道も 徳の道も 徳の道も 徳の道も 徳の道も 徳の道も  
すはく 崇岡の道も 徳の道も 徳の道も 徳の道も 徳の道も 徳の道も 徳の道も 徳の道も

慎むはく 学者の 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と  
り人と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と  
その 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と  
子の 崇岡七千子の 事業と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と  
きく 事業の 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と  
称し 亦一等の 人なり 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と  
の 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と  
曾子 子思も 事業の 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と  
明し 孟も 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と  
らきと 示し 法と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と  
徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と  
奮ひ 歴きたり 方策考へ 時の 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と 徳の道と

て處をよめりていざらんか新天と具記一衆民以  
澤よりよきと也一但其人利達を重く功名を意あり  
此倫のありありありありとていふかれは心術既よ一か  
らん王道と事とすんか意ありとていふか

檀虎回平一巻之上終

檀虎回平卷之下

○人材と長育より平一王道の先んよりあり人材をいふ  
事と三つと施とていふことにて学校とてて教化  
長育の方とてす人材の大端二つ德行より才能より德行  
と能のいふあり人柄のいふこと親孝一兄弟情一君  
忠あり長育の順より親孝忠信篤敬とて何事も皆  
道理よとていふことあり教へることをいふ徳と  
成しむことあり才能と能のいふことあり用とてのそと文章とて  
武技とてともありよき業と徳結とていふことあり  
是と教へむことあり人材と達せしむことあり此徳と成材と  
達せりのは学校の考務とて國家の用とて用とて徳と  
と求めしむことありかたしむ其師なる人誘懐とていふことあり

振ひ業と勤めを自らも徳と成然し或は文武を武採用と  
侍と力と伸へ職とをもちて仁政と布き王道とゆふ  
事何の難とさうわむ又武備と薄し我徳と擡く何の不  
足ありむ学校の教品人道とゆふし人事と擡るあり  
廟堂の月と人道とま人事と擡るありの事あり  
今日のゆふ市とさう用の費意の昔とく其共力とあり  
くして取く由家の恭平と保川と

○今侯國の臣僚共ありとま入しめ文武の氣とま平と  
正統の人と治むの道とまふは他日の月と擡るありと  
凡士人の事ありは必はつと職とまらるありの事ありと治むの  
道理と暗の事と人事とまらるありと擡るありと  
の心得へと事と共人ありと擡るありと擡るありと

教へ論し志とむむわし力と月ひむむしと西家の  
おと益と送りて宿政の用とまらむしと擡るありの忠と  
あくと實と裨益とまらるありと擡るありの事あり  
まて曰夫とまらむと擡るありと擡るありの事あり  
論盡し申りての学術は後生の模楷たりと擡るありの事あり  
邦家の教化と助るありの事あり擡るありの事あり  
解しとらむ共人擡るありと擡るありの事あり擡るあり  
れわらむと擡るあり外人より擡るあり程朱の学と用とまらむ  
まらむし又ハ吾邦武門の規と今と改事と擡るありの益とな  
まらむしと擡るありは誡とらむは誡とらむの程朱の書と  
讀るありと擡るありと擡るありと擡るありの事あり  
るとの事ありは擡るありの一端註釋の細義と擡るあり



ありては窮理の元と云へば一可學の方と傳ふりて自有より  
事として程朱の學と稱するはさう其氣化長程と  
定むりぬたまりとのふるむと傳ふや漢家の諸名家も程朱と  
推尊し一故邦の學者もたむぬあまは從へ其正大徳の  
の言説と傳ふと云へ又程朱の徳行と職形とをさし出  
しとてむむぬの道も其事の法とをさしその氣となり大  
用と傳ふは天下と傳ふるもさう一學術の正大徳なり  
人物の條どかくのやとせんは百世あまは作して師表とするは  
南阮の事ありともや若松の學ありては外人の氣ふ  
面も地位ありともと云へあまは奉るかの程義のめも  
實に千古の玄訓なり但其細義ありては猶遺徳あり  
その徳もあまありあまはいつる明哲のまもなりと

必ありては窮理の元と云へば一可學の方と傳ふりて自有より  
事として程朱の學と稱するはさう其氣化長程と  
定むりぬたまりとのふるむと傳ふや漢家の諸名家も程朱と  
推尊し一故邦の學者もたむぬあまは從へ其正大徳の  
の言説と傳ふと云へ又程朱の徳行と職形とをさし出  
しとてむむぬの道も其事の法とをさしその氣となり大  
用と傳ふは天下と傳ふるもさう一學術の正大徳なり  
人物の條どかくのやとせんは百世あまは作して師表とするは  
南阮の事ありともや若松の學ありては外人の氣ふ  
面も地位ありともと云へあまは奉るかの程義のめも  
實に千古の玄訓なり但其細義ありては猶遺徳あり  
その徳もあまありあまはいつる明哲のまもなりと

夫をく徳をくしと死守をり附を取れざる徳夫と必回復  
と加ふるもの徳を非と遂げ過と文をく程朱の罪人と  
なる所ありしを孔子の教をくはざるものも答と重  
道と答るしとまじき事ありしを也

○漢古の学素漢はりしとむるは宋の諸賢と盛なりしと  
下りしと君徳ありしとを徳るは宋賢の徳も重んぜしとあり  
あつしと人徳を精めしと成を徳とと徳徳をくしとあり  
徳むるに人周子の大極圖の如き易傳を本にせしと  
りしと五行と以て造化と論と至當の説ありしと邵子の  
教學天地と説の太不實際と牴牾と温公の揚と信し  
孟と窮めありしと胡子の春秋と傳しと時平  
の如きもの言多く蔡仲默の書經と注しと古文と織

せりしとて室ありしと信徳をくんや程子兄弟の経説朱  
子の撰述といへとも能と信し人との元よりまじしと綱目  
一書の災祥と載りしと信し人言満るも半なりし  
一套の如くして歐陽子の易傳と信せし天変と外視  
そのの見解は講りありしと其言不しと論すも  
の言をくしとてしと知りぬと宋と朱精細の説  
約む力と著本多きもの人言者革草の綱と奉げ徳と  
四字教もまじしと信し其要とけりしものもあつしと  
あつして考へるも人言も後人の説ありしとこれと  
視し其言説確論と廢棄し竊朱の疎謬と採守  
せば大方の笈と振るはるし元明の際其人亦盛んなり  
豈補闕の撰なりしとありしと吾邦の若き古昔

と姑く其をを並年公本儒学大に開け碩儒と彰りて  
聖学と海内一程朱の流と唱へたり又藤樹陽明の学も  
後ひ仁齋古義の門と云紐徒古文辞の業と流り其  
他家等と云ふの奇説と善不類も有り陽明学の中より  
派と別つるは古義の流と云ふと云ふ紐徒氏の流論故  
論も有り朱子の学流を云々仲門の流と云ふと云  
者吳周と云ふすもあり別々權衡を執り洪範博考と云  
言と云ふも亦其得失是非を云々かゝる元より終  
及るまで云々右自門戸と云ふすも亦其下人材と云  
事りつるもの家も必あり半と云著頭を云ふよりと  
いへる惺高の門羅山派系の如くあり藤樹の紐徒仁  
齋の東涯紐徒の大本周南錦里の白衣滄浪の属

學術のつらんと同く成徳達材何の不可あらんやと  
是と等倫と云ふ西と云く何と云ふなりても其角と云ふ  
人物と其門教育の乃亦と云ふ論也其長教海内  
吳周を掩ふるありて陽明の流の心学を禪悟入り紐徒  
の流の詞章切利と評するも其弊極しは云々半と云ふ  
学者程朱の学の凶大なる事と云ふ末流あり殊淵あり半  
と云ふ事元明諸家の流の終極と云ふも擇ひて我邦  
先軍の各流も考へ流弊と云有るも戒へ流弊と論  
道と云ふ事其才徳と成徳と云ふの方と云ふ西人の用ふ  
供と云ふの心附ありてこれ知識を云ふ諸家の流も  
惑いと云ふ是非と顛倒と後遂と錯法と云ふも有り格と云  
○諸侯の中より學術治道と云ふて聖赫たり水戸の西山

公と稱首とを流博の字に公の徳あり加ふる舜水と  
師とありの名儒とありて史業と成るの事程  
朱とありの神籍佛業とありてめらと國  
とありの盛業は後世の作に著る本たり會津中將程  
朱の學を篤く神道に仰く造るせらと山崎闇齋と  
宗信とありの事業と天下の政と輔翼とあり  
伯和の芳烈とありの推事とありて  
ゆふ此二子に陽明學と主とありゆふ伯和の政法令  
とありて世の稱嘆する本たり秋藩の

靈鳳公の南郭と定まると稱侍とありて徳居の八行園  
維良秋山儀古屋鼎等ありて宋學と業とありゆふ  
ありてありゆふ中興の時と歸一治績第一と稱せられ

ありて近氣憤明をとりと推考するあり白川若沃のあひ  
たり白川養々のありて程朱と主とありゆふ經濟輔依の  
功業と天下の知りあり若沃先侯宋學とありゆふ  
ありて平剛の查詢とありて大石とありて振起とありて  
ありて右六君の學術異同ありゆふ勲とありて其徳業法  
功著作とありてありて其人と侍とありてありての言虚を  
ありてありてありて其徳業法とありて一時の助けあり一邦  
小橋ひとと羅山白石の江都をけるありてありて  
山崎公の長門とありて國原公の筑前とありてありて  
秋藩とありて其學業一軌とありてありてありて  
ありてありてありてありてありてありてありて  
ありてありてありてありてありてありてありて

必其績とすす学士とて後年より亦其別ありとも其  
君徳と法の邦治と賛もんとあふ忠ありて私と譽  
勢は猶くあき都答のけと八月功とす君徳の人の  
文筆は猶り風流と喜ひ燕燕笑傲年月と玩暢する  
めきまの好楽市姑と也一第軍押記とゆひて同  
師より一と大害ありとて何の首ありん邦民と牧  
事の任あり斯と守りの職あり君徳を立て祖武と  
履むの人のいんた優游かとのめき事と海ん又周これ系  
誦法一典漢と掲げ刑法と誨るの軍のいんた海海  
かのため記とと海んありんやかたりとる魚もんや  
○邦國の卿大夫より入必宗廟ありてかありんは宗廟と  
言をかりんやとてあありんてこと徳の人と治るよと知て

あまとの事へ巨室控門を其君も重ん一の也衆臣の  
贖中より亦其民の礼し而せんか宗廟ありては職とと  
海と一室の宗廟宗廟の備りて其大の一室の禮をきめ  
あれん最ま公と申のいん事とて唯門地と預ひ祖徳以  
作る故事よりとて大はみ除むのこもては徳とて邦治と  
辨る事ありんて其位と爵のいん事ありん其功諸  
の長官より群有司属吏の軍ありんて各其職掌と  
形りて律法と綱りまの一人とてこと徳の人と治るの  
道と難とてあありんた人ハ流平の徳長のあまは兵力と  
以て海下移千人の表準と一平帝の儀とて武備と  
海一海下の者の疾苦がく事と懈とていんことと海と  
り余ありてあまとて申の海を君のおる命とて一玉身と

遺さうんとして要し一身の覚悟より後の事の託せよとて  
處重しと仰や其の事さうしてあは隊長の已と他人  
ととの道なり悔を推し知るしかまは推しなむ事  
用事の人のさうん河の蔵の公室の助けたりさうん小大  
甲高の果けりともへとも者共志と立て恩義ふむと同一  
あまは人の初強しと懈情さる事さうんをと其の  
忠臣と一志の義士とも何ぞ必しも大節は臨み其の  
約てさうん忠臣と事しせんや其の事さうんの時其の  
乃あまの忠義既ぬ躍めさうんいとも道さうんたあま  
堂幸くともむるんや

○学流と後し学流と論さる事讀書の人の好む所ありは  
まとも要さる所君のつゝ人忠くさうん又事へて考へたり

兄弟の友けり朋あは信ありお師の別長初の序あり  
官事問の事さうん事さうん理の人のさうんを要し必  
あまは信のさうんあまは学問の肝要と評さるなり学流  
いりさうん推しとも学を何とさうんとも考獨わたり勢  
まかすもさうん好む所不後と知りさうんあは各志と成して  
不用又信をたし一私孔門の真法と評さうん私儒たの果  
実と推したりと推さうん倫理のさうんあまは次行事推し  
わらんめを要しあまはと評けりさうんこれ学問の知能と夫  
まののちり学流のいん学問のいんと同かまともさうん  
其の徳の徳と頼と同一戒めさうんやまをさうん論をんを  
学者の心得諸流と一視をへしとらあまは注臨家の  
経義と宋の諸流の論法はししては殊評さうん宋の

諸侯の流しも朱子の新注を以て定りたし、新注の精意  
を考ふに倫を以てられし細教を以て、程遠域の尊  
明の諸侯家新流を以てし、程遠域の尊明の諸侯家新流を以てし、  
流方より程遠域の尊明の諸侯家新流を以てし、  
注疏の学約を以てし、又宋學部、明の心學も、伊蘇の古義  
物氏の古文辭も、以て程遠域の尊明の諸侯家新流を以てし、  
學の二途も、師一か、一、吾國と、  
門戸と、建、立、ち、り、え、あ、る、れ、ん、も、性、と、以、て、身、と、を、あ、ら、う、  
學問の方宋の諸侯の流と、  
を宋制と、  
其流の流、  
た、あ、と、と、通、天、下、の、を、做、り、し、て、百、世、を、後、て、思、は、

わりの道ありと存りふは是も亦なり

○詩文の事、吾解、  
た、  
何、  
同、  
又、  
此、  
よ、  
流、  
以、

まゝり物さ清もあまの舟といふたしあまの要をりふ文の  
一體あつて別なつりつものなれば漢字中の一事より母の物と  
相違あり情状ゆたなり少年の日もあつたし一人の如き  
まゝり物さ清もあまの舟といふたしあまの要をりふ文の  
一體あつて別なつりつものなれば漢字中の一事より母の物と  
相違あり情状ゆたなり少年の日もあつたし一人の如き  
まゝり物さ清もあまの舟といふたしあまの要をりふ文の  
一體あつて別なつりつものなれば漢字中の一事より母の物と  
相違あり情状ゆたなり少年の日もあつたし一人の如き

家まゝり一準とする事と夫の化と自運よき人さなり  
家規吾輩あつたれも家軍の詳ふ知らるるあつたれ  
然して後同也一但詩と作らるる一様あり是を論じむ  
苟も詩章はあつたれは吟社に傲視し初壇を誇談して  
陽春白雪間天嘉嘉名ははたど前軍と睥睨し生徒と欺  
用して自の他家とひて今するもむむ先何そ風流の類を  
まや家まゝり詩を心聲をりし其公傲慢放肆自の情を  
人とあつたれ其公必あつたれとて一様あり一様あり  
そ記すと別する詩を家軍の類も同く家規と論する  
よのちれいふ小者もとて一たりも柳も詩と論する  
あつたれいふ小者もとて一たりも柳も詩と論する  
あつたれいふ小者もとて一たりも柳も詩と論する  
あつたれいふ小者もとて一たりも柳も詩と論する



せぬもつり一語一語を感一のたぬも後一昔の人も  
かくあじし今の人と友ありのり一いつらんは夕人あり  
とのら一た一とりの邦一病つら一海一磁一  
まき一まき一あつよのち一とち一知一たるも一と一  
しき一と一あつら一

○文章一いつ一おを感達一の具一と一か一ら一  
ち一いつ一と一入一を一せ一或一を一き一は一入一之一き一の一す一の  
ち一あ一も一は一ち一の一あ一を一を一を一は一ち一の一は一を一  
ゆ一其一終一極一以一辨一し一く一事一又一終一あ一を一我一の一を一以一を  
る一か一を一各一邦一の一俗一又一通一ち一の一書一極一を一可一め一と一あ一の  
あ一入一た一も一と一た一能一と一ら一ん一と一な一ま一に一漢一学一と一と一す一の一の  
文章一と一あ一げ一れ一は一後一史一の一言一わ一ら一つ一と一め一ら一す一言一と一

治文字のれあつひあ一解きらるるたけなり他人の文解と  
と付まのりも自力ありて付らるるたけは細き下と  
減一と一常一と一ち一あ一の一古一の一作一と一叙一事一と一後  
論一の一門一と一能一り一あ一ゆ一と一文章一早一の方一と一示一作者一の一お一と  
論一したる書一と一多一も一と一大概一周一り一漢一の一文一と一  
其後一を一唐一の一韓一柳一宋一の一歐一蘇一を一の一作家一と一あ一は  
正一と一これ一も一精一究一の一あ一と一は一浩一遠一の一思一と一精一利一の  
ち一と一は一敏一快一の一用一と一と一は一流一の一術一必一其一要一と一得一と一善一  
導一と一この一術一は一吾一曹一拙一手一の一あ一り一と一あ一と一す一物一と一文一と  
作一の一入一不一は一誇一耀一の一癖一あり一と一性一は一直一と一つ一あ一と一た一れ一は一文  
解一と一忽一未一昔一と一人一の一示一と一の一た一れ一は一不一善一と一り一と一  
誇一と一入一ま一と一ん一也一試一とい一と一あ一と一は一あ一と一あ一と一あ一と一

リたつておもなうりさとも家入なり千年前の人かゆらじし  
千年後のもふともさす下へおとつてんま筆の例の如く  
病者とも下へ望慙愧をかくらんや

○皇邦の古典遺編より祝册子物法類より記澤野史  
の属とも海樞より神の乃法礼の所始実法制定等と考  
知る事亦学者の要務とも苟くも学問と事くとものお  
後又天城の書冊と事く教法政要と書く天文地  
理と解く詩紙文章と事く無亡盛衰のめくとも  
祝と事く邦城の事蹟職方又精く言辭と務くは古  
今又通せかして誦も亦書くといふも物も亦書と  
演じの亦歌部法のみへ神道中りのおと建まへ儒  
教佛法等又異時せんといふと流りその初元を本と宗あり

内と事く一表と載く心と言ん事りの忠厚ありといふとも  
畢竟撰常附會の私言小師一甚きんといふも一書禮意度  
の祝と事く亦書候をいさなり神代卷古事記のめだハ  
カと流りて論解と事くいふも亦書上古のに傳りて後世も  
あり筆裁せりといふも祝者のそ人言の海が似く巫覡  
祝史の流り流り萬葉集以下の歌詞冊子物法の文章を  
實に古時の流り流りと祝のまのゆと事くれもそ又書と立  
世ふ流り流りの流りてと流りて和歌と流りて和文と流りの  
用も傳りてまの流りか神代中りの邦の書く人民は俗  
百世ふ流り流りの流りて流んを可なりといふも其教古書中小  
流り流り流りてと流りて遠くといふも其信を流り  
あつたり其史傳諸記等と流り古今も通り流り事ハ流り

兵備と定ん又うの申余内介の辨く君と名る國とまん  
まりの言なきもしくもゆくふ知るへきありて何と必も学  
ぶたふありんや其體と非く候と擯けて激論候と他  
と書り自誇り着き入る候のまの言ふ事のびらるあり  
在りて先鞭と着けて一時は快意ありまを懐適する本  
何のそ候といふ源流候に記候ゆゑれも傍よりあれと  
視てはわんこ思候類もそのあり

○兵書を祖漢か通して讀むべきも今世も約りて兵書  
秘家何にも成書のありまも其門とありて秘より半おれ  
る候らものも秘とよく其まなきり入る候秘家の流と清徐し  
一大備の冊と備と武備志のめきと候く有用のまのえ  
必讀へき書とる毎くまも此本換て候かあるへ

七書と視り明の兵書とも讀み家邦の兵書軍記と併せ  
云海一かといふあり事と備けて懼き謀と好く成さん  
その體教めもせむりる事と増々一但書書とまは讀  
たりとて戦陣の事とよくまといあはれ水際先取と  
白河名將の計畧と見録長行陣水際先取と諸知る  
事兵書軍記とよく讀みて何のありきて候むき備  
備みての勝負と此中よむまを其師とつきて當ふ  
いと備化の名書とも讀んて有益のまのめむく御法  
礼の事一人君大臣とる人の事めあつてまを御  
礼とる者も此御とあすべきあり候ふ礼と名もまの  
まのまの御法と御法とありてよく讀まはかへる  
今の世のめき本無慮と此類まの事とて候は二百

も此にたまたは此後の上層と保り千百年の通人本とを  
保りて者れしごとくありて一に職の定まり法と層の定り  
かたぬ事と徹する事とありてむかひむかひの通人本とを  
まり小同なる時世の久くはあるといふれく保りてあり  
一士の志す所何れありの善か悪くはよもいふれりて法と永  
く一礼とをささるの道とありし初るる世の息の夫と通を  
いふ所の如く天下の若年と推持する功とをささるる一其法と  
永くする道は己と他人と保りてはるめと為さるる一礼の  
をささるの道とは文事と律一武佐と徳とて腐るるべき  
なり其書と法とを武佐と徳とて常案するべきなりかくも  
あつて一と保りてあり

○秦の時法令と字ありんて欲するは吏とめて律とす

とらる治りの時書と法と古道と風俗と一非なれば此の法は  
まてつたれり法令多く其時と其時と異なるものあり  
あまとな書と求めて知りてあつては吏人と師とて字は  
され初り物なるといふ今も上は二朝もと合せらるる  
法と其のまて定りて向ふ又右司の法とて法と定りて教  
まて知るる不問せんと思ふものハ吏人と物と字ありて  
物と法令と事とありて一職ある層一難易と信置せざる  
多し一是と吏人と物とありては各自の心付ありし初り  
たりし初りも其職と信りたる條令ハ親族も漏泄せざる  
下とされ外人も不問する魚小ありてこれを云物と志せざる  
所の大禁を令ありて一而も守りてせざる多く平生法  
令と暗く信りてと保りて罪とれを平ありて士人の至り



お衣の教法は於吾邦の書と誘ひて書難源をも得て武  
門の心得事の要記等と云ふ事とも加へて人の好尚を  
不問なり又衆を治して教の法を用とせしむる事守るに於  
ては約して教育の印字と云いせしむる人倫と云ふ事  
徳教との心なく有る事なり其れも尚も人材と醸し  
びて用み供する術と云ひの程も道に直ぐし其れに  
文武より法礼より法を治すに務めんと欲せん事  
實は道家の要務なり

○道と志と事と謀と者ハ切在利源ハ切なりと云ひて徳教と  
まじりて徳教あるとハ勿其汚る事あり事守りと云ひ道  
と云ふ事ありやかくてはかくて我を不義の道入り或  
之れは徳と誘ふ術の徳と云ひ其れ徳の道なり

その事ありとも名と教の事と云ふ事ありと云ひて徳教と誘ひ  
の果てはありとも名と教の事と云ふ事ありと云ひて徳教と誘ひ  
人と云ふ事ありとも名と教の事と云ふ事ありと云ひて徳教と誘ひ  
ふ事ありとも名と教の事と云ふ事ありと云ひて徳教と誘ひ  
留事と云ふ事ありとも名と教の事と云ふ事ありと云ひて徳教と誘ひ  
ある事ありとも名と教の事と云ふ事ありと云ひて徳教と誘ひ  
集め礼と云ふ事ありとも名と教の事と云ふ事ありと云ひて徳教と誘ひ  
天命人教と云ふ事ありとも名と教の事と云ふ事ありと云ひて徳教と誘ひ  
其道と云ふ事ありとも名と教の事と云ふ事ありと云ひて徳教と誘ひ  
かの大徳なりとも名と教の事と云ふ事ありと云ひて徳教と誘ひ  
子のありとも名と教の事と云ふ事ありと云ひて徳教と誘ひ  
ことありとも名と教の事と云ふ事ありと云ひて徳教と誘ひ

おぼろぐい人の義ありし知く八何のころのうらむ事ありむ  
山阿の蔽と来りて武王の事へらう一人もあり溪上の奥と  
泊て文王と待侍たり安も有り華食孰飲共樂と汝め  
るり顔削あり上漏り渥共宛以具んたりり一原  
思あり諸葛の初年陶令の晚節るれ志と汝り  
て憂阿せし高舉超覽して汚濁をる茶をく亦世の  
師事ありしゆ鳴鶴遇不遇天ありあふみんを  
命と知るものもす海内の虜と當者何の汝りう  
らんよ余とありもの故人と汝りき

煙霞留事卷之下次

煙霞留事二策病時疏筆初る三稿殊終  
必多ぬ有属目者乎荊菲采之可也

文化十申秋下浣

木脇儀一即著述

天保癸己之春寫之七十二翁許九齋

天保十二壬寅年秋九月廿九日於南御菅尾馬見取矣  
後山中書寫之  
中村萬喜直道





なまき連うさのた遠くしの想り午のまをなうくはなほ  
ちんかひちちひ

道一あつ君の代なれや後山なうらうらもあうり  
あまの

栗山の梅屋の舟の書言く水まおつしめあまに

秋凡のあひしむさくかみあのらの伝を境うらも

ゆいらい初めことほきくまらねんそたかくいんて

ありきいしあはしあう

薰菫録卷之百七十九終

薰菫録卷之四十四

